書評　視ること，読むことから，聴くメディアに立ち返り，そして。

金山智子　著
『ケアするラジオ
――寄り添うメディア・コミュニケーション』

（出版社，2024年，Ｂ５判，263頁，2,600円＋税）

龍谷大学　松　浦　さと子
Ryukoku University　Satoko Matsuura

古来人類が意思伝達を口承に依ってきたことを考えると，現代は文字や映像というメディアに過度に頼りすぎているように思える。スマートフォンを常に携帯するデジタルネイティブの若者たちは電話すら厭う程だ。なのに，ラジオ，Podcastという「声」のメディアは廃れていない。指で操る文字や映像から，現代人の関心は「声」に，「語り」に回帰しつつあるとは言えまいか。

『ケアするラジオ　寄り添うメディア・コミュニケーション』の読了後，そのようなことを思った。何も古来まで遡らずとも，と紹介された「声」のケア事例は，恐慌化のアメリカ国民に一斉に呼びかけた権力者のプロパガンダだった。現在も多くの権力者が文字や映像で「ケアに見せようとする」コミュニケーションを発信している。が，編者はそれとは異なり，現代の日本のコミュニティFM局で実践されている当事者たちのコミュニケーションにケアする声を発見した。離島で，刑務所で，病院で，外国で，被災地で，日常の社会から離れたところで孤独な立場に置かれた人を思い，声をかけ，「語り」を引き出すコミュニケーションは，そこに救いを受け止め，ラジオを通してそれを聴く人をもケアする。筆者たちはいずれもそのコミュニケーションに聴き手としても関わり創り手にもなった女性たち。金山智子，芳賀美幸，小川明子，吉富志津代，久保田彩乃の筆者たちは，声で紡がれたラジオでの声の親密さを，限りなく当事者に近いところから研究者の立場として読者に紹介し，伝えてくれたのが本書である。

ラジオの「ケア的」な現象や実践の研究はすでにアメリカではなされていたというメカニズムの観点から，とくに技術的な側面，物質的特性からの福永健一の研究では，なぜラジオが「ケア・メディア」となりえるのかを説明した。親密な感情や態度がパラ言語としてどの程度伝わるのかにかかわる音声コミュニケーションにおける口調のメカニズムを知ることは，ラジオを用いてコミュニケーションしようとする際に得ておくべき知識であろう。

ケアの倫理の観点から，ラジオのケア・コミュ

ニケーションの意味・意義を学術的に論考し，ケア・コミュニケーションが地域社会に何をもたらしているのかを本書は分析，紹介した。経済的に持続できなくなったコミュニティ放送局の閉鎖や廃業を聴くとき，地域社会に「どう役に立つか」の側面からメディアを考えがちである。しかしケアする人々は，役目が何か，利益が出るのかを考えない。にもかかわらず結果として地域にかけがえのないものをもたらしている。重要なことは，リスナーとの関係を深く考慮したうえでの「知識」「確認」「共感」「表現」であると金山はいう。

ラジオを「情報」伝達や「効能」からのみ論じるのは間違いだ，と気づかされる。ラジオの「コミュニケーション」の力は多くの研究者が語ってきた。「ケアのコミュニケーション」がときおりなされて感動が人々にもたらされていることも伝えられた。が，それがどのようなときに，どのような人々によって，どのような立場の声から，どのような「ケア」が行われ，それが何を当事者に，リスナーに届けているのか，それらは十分に記述されてこなかった。本書を読むことで大切なラジオ研究の基盤が築かれたように思う。

小玉美意子の「ケアの倫理」が前提となる「人びとを気にかけたり心配させたりすることであるとともに，注意を促したり世話をしたり，介護することでもあり，慰めや癒しという意味にもなる」と適用範囲の広さを金山は重視する。そして「ケアの倫理」を多角的に説明する。ケアが多くの論者によって考察されてきたことで，奥深く，幅広い声のケアに意を注ぐ。本書で複数の筆者が多用するミルトン・メイヤロフの「ケア」を考察した内容を金山は紹介する。「人間の生きる意味を，他者をケアすることにおいて見出し，互いが犠牲になるような排他的関係ではなく，自己の成長に資する関係」と。そしてメイヤロフの提示した「①知識，②リズムを変えること，③忍耐，④正直，⑤信頼，⑥謙遜，⑦希望，⑧勇気」は「ケアの主な要素」として，とくに，「ケアの倫理」の新たな関係性を拓いたものとして本書で注目されている。

また，ジェンダーの観点からも，先行研究が「ケアの倫理」を論じてきたことに，再検討を試みている。男性が代表することの多い多数派の道徳的思考に対して，少数派が「女性の経験，責任の感情から配慮すること」を訴える考察が，より広い公的領域のなかでとらえなおされることが求められていると論じる。現在では，心理，福祉，看護，思想，政治，教育，環境といった多様な領域で，「ケアリング」が重視されているのだと。

選挙の年といわれた2024年に本書は出版された。メディアがいかに正しい情報を伝えたか，既存のマスメディアとSNSの対比で選挙結果が左右されたのか否かが，社会の人々のメディアへのもっぱらの関心となった1年である。SNSは，新聞・テレビ・ラジオと接触しない人々に大きな影響力をもつようになり，都知事選，衆議院議員選，兵庫県知事選では，想定されなかった結果が議論の的であった。ケアするラジオはそれらからの評価を必要としないが，地域の人々に大切にされる番組として支えらえられている。

災害大国で，地方が疲弊し，少子化が進み，高齢者が病院で孤立し，服役を終えて更生を目指すための希望が見えない。社会問題を解決する術を明確に発見できていない日本で，「ケアするラジオ」は今，各地で求められている。本書の事例は，特殊なことではないはずである。なお，2024年は同様の観点から女性の出版が相次いだ。本書をはじめ，小川明子の『ケアする声のメディア　ホスピタルラジオという希望』青弓社，大牟田智佐子の『大災害とラジオ　共感放送の可能性』ナカニシヤ出版も併読することで，2011年の林香里『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム　ケアの倫理とともに』岩波書店，2012年の小玉美意子『メジャー・シェア・ケアのメディア・コミュニケーション論』学文社の問いかけが日本のコミュニティに実装されてきたと感慨深い。ケアの語りは，バトンを受け継いだのである。